

「底が突き抜けた」時代の歩き方 281

「存在倫理」からみた同時中枢テロ

永遠の自由のために戦うという旗印を掲げるブッシュのアメリカと、自分らの宗教的な信仰や理念に敵対する者は殺してもよいというビンラディンのイスラム原理主義。そこで対立し合っているようにみえるけれども、本当の対立はそこにあるわけではない。アメリカの永遠の自由は生命にかえても信仰するイスラムの人々を理解する気がないし、イスラム原理主義の命がけの信仰のほうも自由について何も考えようとしなないというところで、対立が剥き出しになってきており、《両方とも手前味噌なことをいっているねという以外の感じは持てない》と、吉本隆明は『群像』（02・1）のなかで説く。お互いに自分の立場を相手に押し被せようとするだけの不毛な応酬を、いわば解体する場所「存在倫理」にほかならないということだ。

《社会倫理でもいいし、個人倫理でもいいし、国家的なものの倫理でも、民族的な倫理でも、何でもいいんですけれども、そういうもののほかに、人間が存在すること自体が倫理を喚起するものなんだよ、という意味合いの倫理、「存在倫理」という言葉を使うとすれば、そういうのがまた全然別にあると考えます。それを考慮しないと、この手前味噌な言い方とやり方は理解できないんじゃないかという感じ方になっちゃうのです。

「存在倫理」という倫理の設定の仕方をすると、つまり、そこに「いる」ということは、「いる」ということに影響を与えるといいたいでしょうか、生まれてそこに「いる」とこと自体が、「いる」ということに対して倫理性を喚起するものなんだ。そういう意味合いの倫理を設定すると、両者に対する具体的な批判みたいなのができる気がします。》

この「存在倫理」については《電子であろうと、中性子であろうと、原子核であろうと、それが「ある」ということは、「ある」ということに影響を与える。つまり、「ある」ということは、「ある」ということの影響をこうむることを抜きにしてはいえないという物質観みたいなのがある》という量子力学、量子論を種にして考えた吉本隆明は明かしているが、この存在していること自体の倫理性とは、人間がサラリーマンや商売人や主婦、タレントとして存在しているのではなく、人間がただ人間そのものとして存在しているという以外にない場所で喚起される倫理性と考えられる。生まれたばかりの赤ん坊をイメージするとよくわかるような気がするが、人間が赤ん坊のように丸裸の人間として存在しているところでの倫理性を「存在倫理」と名づけるなら、道連れにされた乗客については、テロを行使した側の倫理もテロを行使された側の倫理も適用すること

はできず、ただ「存在倫理」を適用するしかないということだ。

吉本隆明は「存在倫理」について、今回のテロに触れながら、こう語っている。

《テロが悪いというんなら、戦争の方がなお悪い。理屈上、そうだと思うんですよ。従来倫理からいってもそうなので、ブッシュがいうように、テロが悪くて、テロをやられた方は善だから、おれもやっつけてやるというのを肯定するわけにはいきませんよ。

そうすると、その場合には、テロも悪いし、戦争も悪いといいかえれば、それで大ざっぱな粗大ごみみたいな意味でいえば、それでけりがついちゃう。だけど、もっとちゃんと、それこそ内在的な倫理の動きみたいなのを自分の実感からずっと出していくと、どうしてもそういうふうにはならぬので、ここだけは許せぬよと一個所だけ残ります。

だけど、一般的に言って、乗客が無関係だからというんならば、あのビルに入っているやつでも、無関係なのがたくさんいるじゃないかといわれると、その無関係という意味が全然違うんですよ。乗客の無関係と、たまたまそのビルにいてとぼっちりを食った無関係とはちょっと違うんだよという区別をする以外にないんですね。

そうすると、とても微妙だけど、微妙なところを振り分ける何かの概念がどうしても要るような気がしてきちゃいますね。》

《乗客をおろさないのがおかしいというんなら、ビルの中にいる、ただ働いているだけのやつが道連れになるのはおかしいじゃないか。それをいわないのはおかしいということになって、おかしいというのなら同じじゃないかという理屈になっちゃうんだけれども、それはまるで違うことなんだ。ビルの中にいる、関係も余りない、雇われているだけだという人の問題は、例えば戦争で爆撃を受けて、とぼっちりで非戦闘員がこれで死んじゃったとかいうのと同じように、従来の社会や政治の倫理ではなくなってしまいます。》

この吉本隆明の后者の発言を受けて、加藤典洋も次のように問題を明らかにしようとしている。

《あのビルの中に勤めている人はもちろん何の罪もないんだから、やられたら大変ですよ。でも、そこに勤めているということは、世界の構造の中に位置しているということで、それと乗客のあり方は違う。人間は存在して、そこで生きている限り、必ずそういう世界構造の属性を持っているわけだけでも、旅行で飛行機にたまたま乗り合わせたというケースは、その属性が全くはがれているあり方を象徴している。つまり、何の属性もなく、存在だけが露呈している状態です。だから、最初にいわれた「存在倫理」が出てくる。》

ビルの中で働いていて巻き添えを食った人々に「存在倫理」が当てはまらないのは。彼らはそこでビジネスマンか警備員か清掃員として存在し、なにものでもない、全くの丸裸の人間として存在しているわけではなかったからだ。このことは一体なにを意味するかというと、いいかえると、「存在倫理」という場所は一体どのような問題を突きつ

けているかという、テロや戦争が引き起こされる倫理がけっして及ばない、全く無関係の領域だったにもかかわらず、今回のテロはその全く無関係の領域を強引に巻き込んでしまったということである。乗客の道連れとはそういう問題であった。この領域はけっして相対化が許されない領域である。人間がただ人間そのものとして存在する領域だからだ。この領域がもし攻撃されて抹殺されるなら、人間が人間として存在することはできなくなってしまう。どんな倫理を持ってこようと、この「存在倫理」を侵すことは人間が人間として在る領域を否定するが故に、吉本隆明がいうように、どうしても「絶対的な悪」とみなさざるをえなくなる。

テレビや新聞、雑誌等にみられるそれぞれの論調はアメリカの報復攻撃支持か、あるいはテロはよくないが報復攻撃もよくないという声が大半であった。アメリカの報復攻撃支持は、やられたらやり返すプラステロの根絶であって、そこには絶対悪を見通す「存在倫理」が浮かび上がってくる余地は皆無であった。同様に、テロも戦争も反対の非戦の主張もまた、どちらもどちらの喧嘩両成敗的な発想に傾いて、テロ空爆を内在的に潜り抜けて微細な構造差を探り当ててまなざしをもたなかった。要するに、あちこちで喧しく論じられているどの言説にも、テロ空爆を支える倫理から一步抜き出すような視点は孕まれていなかった。そんな中、ほとんど注目されることのない地味で、控えめな語り口から「存在倫理」の観点が、初めてみるまなざしに包み込まれて赤ん坊のように生みだされようとしているといっているといえる。

この対談でも乗客を道連れにせず降ろす方法もあったという問題について、話されている。《イスラム原理主義を支持しようと、アメリカを支持しようと、それはどうぞご自由にというか、それぞれ自由に個人が選択していいこと》だが、《ただ、片っ方の多発テロの方にインチキ性があるとすれば、要するに、乗客をおろさなかったということだけで》、だが、それに《ちゃんとすぐ反駁する人がいて、それをおろしていたら、あんなハイジャックはできないですよというから、そうかな、僕はそう思わない。「みんなおりろ」といって十分ぐらいでみんなおろしちゃって、(笑)自分たちだけで行くことは可能な気がするんですよ。いくら国内線だとしても、気がついたときにはどこかにぶち当たっていたということは可能じゃないかと思いますし、もし仮におろしたためにテロがあんなにうまくいかなかったとすれば、僕は、その方が大きい同情と、大きいシンパシーを世界中に感じさせたと思う》し、《乗客を道連れにしてぶち当たって、ビルが二つ壊れたとか、数千人死んだ。それが乗客をおろしてやっていたためにそれができなくて、失敗しちゃったといったら、失敗した方がはるかに重大な意味を与えたでしょう。つまり、そうなってくるとあれはヒューマニズムであるし、文明的な意味合いでの人道的であるし、もちろん命を的にやっちゃったんだから、これは宗教の恐ろしさだよという意味合いでもそうだし、そっちの方が影響は大きいともいえると思う》と、吉

本隆明は述べる。

この発言は、加藤典洋が《でも、そういうことは最初からめざしてなかった。最初から道連れにして一気にやっちゃおうというつもりで、計画をつくっていた。》と返答しているように、ありそうにない空想的な考えでしかないことは明白である。吉本隆明が乗客の道連れにどうしても目を留めるのは、「存在倫理」的な観点を胸中に芽ばえさせているからだ。逆にいうと、乗客を降ろすということに誰も考えが及ばないのは、そこに目を留めるべきどんな観点も思想も蓄えていないからである。そうすると、乗客を降ろすという一見荒唐無稽にみえる考えは、本当はそんな発想が生みだされてくる思想の視力を持ち得ているかどうかという問題として迫り出しているにちがいない。

ここで吉本隆明に倣って、テロリストたちはどうして乗客を道連れにしたのか、どうして降ろさなかったのか、という問いを発してみる。その問いは、彼らが無関係な乗客を自分たちの自爆テロに巻き込まずに、直接攻撃の目標を金融と軍事の拠点に定めることを意味する。もちろん、彼らの計画では当初から乗客を巻き込む予定であったし、現に計画通り実行されて乗客は巻き添えを食った。だから、彼らは乗客を降ろすべきではなかったかという問いは、彼らはそうしたほうがよかったのに、ということであるより、彼らのテロ思想に乗客を降ろすという考えが全く含まれていなかったという問題を大きく逆照しているのである。つまり、テロリストたちの駄目な点は、旅客機を乗っ取って世界貿易センタービルに突っ込んだことにあるのではなく、無関係な乗客を巻き添えにしてその人々をも自爆の対象に無差別に含めてしまったことにあるのだ。

乗客を降ろすことによって当初の計画が遂行できなくなったとしても、「失敗した方がはるかに重大な意味を与えた」し、「そっちの方が影響は大きいともいえると思う」と吉本隆明が述べたことについて、加藤典洋はこう反応を返している。《なるほど。見落としが二つあるわけだ。テロリストの側でいうとその方が戦術としては有利だったろうになぜそうしなかったのかという問題があるのに、そのことは気づかれていない。アメリカの側でいうと、たまたまあれが道連れテロでない形で起こっていても、同じくらい数千人死んで、アメリカは黙ってなくて、同じように非難したはずだけれど、でもそれだったら、ここに道連れがあったということの意味が取り出されていないことになるんじゃないか、でもそのことが、気づかれていない。》

自爆テロ攻撃を失敗することの方がもしかすると、「戦術としては有利だったろうになぜそうしなかったのかという問題」として捉えると、問題が矮小化していきかねない。乗客を道連れにしないという問題は、吉本隆明がいうように、人間が存在していること自体が倫理性を喚起する領域に接触するかどうかの問題であって、有利か不利かという戦術に還元されていく問題ではありえない。たとえ戦術としては不利であり、失敗するかもしれないとしても、「存在倫理」を前にしては戦術の不利もやむを得ないという思

想を、自爆テロを行使するイスラムの大義が孕んでいるかどうかという問題なのだ。吉本隆明が道連れを避けたために失敗したとしても、そのほうが「はるかに重大な意味を与えた」とか「影響は大きい」というのは、「存在倫理」を中心に据えていっていることであり、戦術として語っているわけではけっしてない。

加藤典洋の「見落としが二つ」という指摘はしたがっていいかえると、テロリスト側に「存在倫理」の領域が全く気づかれていないということは、彼らの思想や大義の中に人間が人間そのものとして存在していることを否定する要素が含まれているということであり、同様に彼らの自爆テロを言語道断として非難するアメリカ側も、乗客の道連れとビル爆撃の死者との微細な区別が気づかれていないことによって、彼らの自由や正義の中に「存在倫理」がかかえこまれていないことが明らかにされているのだ。「存在倫理」に気づかれていない点ではどちらも同じだとしても、自爆テロの側は実際に「存在倫理」を侵犯したのに対して、アメリカ側はまだ侵犯しているわけではない。その可能性をたぶんに含んでいるとしても。

これまでの衝突や戦争がそうであったように、今回の「戦争」も結局のところは大勢の死者を積み重ねていただけである。どちらもどちらではないかとこれまでと同じように眩きたくなってしまうけれども、「存在倫理」の観点が明らかにされることによって、どちらの「正義」もけっして通用しない「絶対的な悪」が見通されることになった。つまり、「存在倫理」の観点が導入されることによって、どんな「正義」や言い分も吹っ飛んでしまう「絶対的な悪」を裁く眼を持てるようになったのだ。

今回の自爆テロでいえば、テロリストたちがなにをいおうとも、乗客を道連れにすることによって、彼らは「存在倫理」を爆撃し、「絶対的な悪」の領域に踏み入ってしまったのである。本当の意味で、彼らは自爆したのだ。要するに、ここで自爆というのは自分の乗っている旅客機を自ら爆破するという辞書的な意味あいではなく、自らもまた人間として存在していることが喚起する倫理性を自ら爆破してしまったということである。その「存在倫理」を爆破するなら、もう人間として生きていくことは誰にもできなくなる。だから彼らは当然のようにして、道連れにされた乗客と共に自らの命を散らしていったが、彼ら自身にはそのことはなにも気づかれないうまでであった。いま私たちはそのことに気づくことができる淵に立っていることを知らなくてはならない。私たちが目指す「正義」や「自由」は、微細な「存在倫理」を最も大きくかかえこんだ思想によって突き動かされていくものであらねばならないことを。

2002年2月13日記